

## 早期多収で省力化が図れる スモモの樹体ジョイント仕立て栽培

### 研究のねらい

県内スモモ産地では高樹齢化による生産性の低下がみられ、改植の必要性が高まっています。しかし、改植は収量が回復するまでに長い年月がかかるため十分に進んでいません。

そこで、神奈川県が開発した「ナシの樹体ジョイント仕立て栽培」を応用し、スモモの樹体ジョイント仕立て栽培のための育苗技術、骨格枝の早期確立による早期成園化および直線的樹形を活かした省力化技術を明らかにしました。

### 技術の特徴

- 1 樹体ジョイント仕立て用の育苗は、1年生苗木を地上部1～1.2mの充実した芽で切り返し、先端1芽を伸長させ、残りは摘心して葉を維持し、全長3.3m以上の2年生苗を育成します(図1)。
- 2 10aあたりに必要な苗木本数は167本(株間1.5m×列間4m)で、慣行栽培(5m×4m)の約3.3倍の苗木が必要です。

- 3 本圃には2年生苗木を3月上旬までに定植し、棚下20～30cmで水平に誘引します。接ぎ木は、主枝の先端を延長方向の同様に水平誘引した隣接樹の主枝基部に行い、直線的に連続した主枝を完成させます(図1)。
- 4 樹体ジョイント仕立て栽培の2～4年目の10a換算収量は、初期から優良な側枝が確保できるため慣行の二本主枝栽培と比べ約1.5倍程度の増収になります(図2)。
- 5 樹体ジョイント仕立て栽培の果実品質は果実重、果実糖度、硬度ともに慣行の二本主枝栽培と同程度です。
- 6 樹体ジョイント仕立て栽培の全作業時間は、慣行の二本主枝栽培と比べ27%短縮できます(図3)。

### 今後の取り組み

平成25年度ぐんま農業新技術として普及指導機関、JA生産部会等と連携し、各産地へ普及を図ります。

(執筆者：平井 一幸)

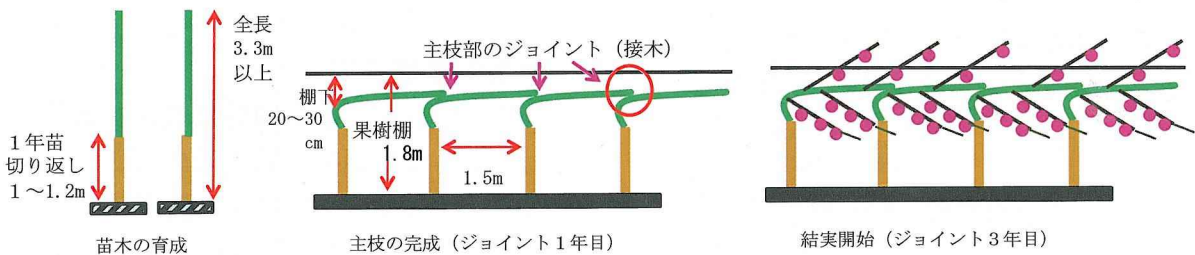


図1 スモモの樹体ジョイント仕立ての概念図

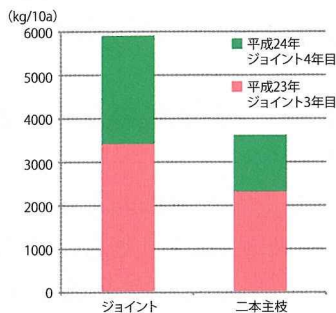


図2 「貴陽」の10a換算収量の推移

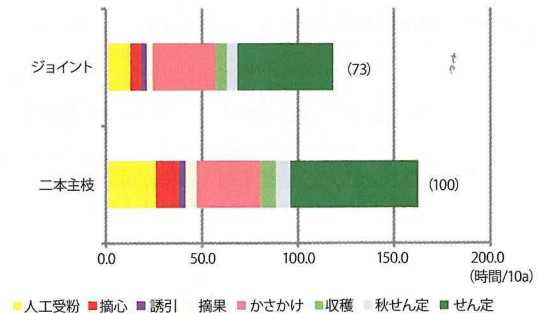


図3 「貴陽」の10a換算の作業時間